

やまなし文学賞青少年部門佳作

悪意の居留守 伊藤東京・作

表情のことなんか気にもかげずに、一生懸命に口を開けて最後の歌を歌った。

温暖すぎる気候のせいで桜の雨が降る演出はないけれど、それでも私たちは胸を高鳴らせて卒業式に挑んだ。やっぱり何人かの女の子たちが唱歌中に泣きだして、私の目も潤んだけれど何とか堪えた。とはいえ、ほとんどのクラスの人たちは同じ付属高校に通うことにならるから、男子の何人かは泣いている女子を見て、からかうような笑みを浮かべていた。女々しいなと嘲笑したのかもしれない。

中学校生活があつという間だったように、卒業式もあつという間だった。会場から退場した後の私たちは卒業証書を持って、ほとんど散りかかっている桜の木の前で写真を撮った。仲が特別いい女の子同士は、二人並んで自撮りをしていて、それを見た私も隣にいる親友の朱莉に「写真撮ろう」と声をかけた。

「いいよ。優香泣かなかったんだね」

「そりゃそうでしょ。ほとんどクラス変わらないし。それに朱莉いるし」

「そっか。その点美佐のところは別々の高校でお別れだもんね」

後ろからする泣き声だけで、美佐を含めた5人グループの女の子たちが泣きながら美佐との別れを悲しんでいる様子がよくわかる。美佐が抜けた四人グループは、やはり誰かが欠けているというような感じがする。

二人で記念撮影を思う存分した後、卒業証書を持っていつものように下校した。結局大多数の人が同じ高校に行くので、クラスの半分の親は卒業式に参加しなかった。お母さんも、朱莉の親が来なかったので、友達同士帰りたいだろうからと先に帰った。だから二人で田んぼが広がる帰り道を、いつも通り下校する。

卒業式という一世一代のイベントのはずなのに、思っていたよりずっと呆気なくて、肩透かしを食らった気分だった。

「なんか、卒業したって感じしないね。どうせみんな付属高校に行くだけだし」

「そうねえ。でもね優香」と朱莉が急に立ち止まった。ん？ と振り返ると、朱莉はポケットから何かを大切そうに取り出した。

「卒業式っぽいこと私したよ」

そう言って顔を少し赤くしながら、笑顔で朱莉が両の掌てのひらで作ったつぼみを開いた。そこには金色に光るボタンがあった。まさか。

「これ、第二ボタン？」

うん。と朱莉が首を縦に振った。

「陽介くん、他の高校に行っちゃうから、お願いしてみたの」

呼吸が浅くなって、頭が急にさあつと白くなった。特別な日だと浮かっていた心は既にゴムみたいに硬くなってしまつて、次の瞬間、頭に血が上っていた。

「教室出る前に声かけたの。だから、多分誰にも見られてないと思う」

そう言った朱莉の言葉が、ぐわんぐわん鳴る頭のせいで、うまく理解できない。朱莉のことが急に赤の他人のように白々しく感じられて、もじもじしている朱莉をよそに、私はぱつとそのボタンを奪い取った。そして目一杯振りかぶつて、できる限りの力で、ぶんと腕を振った。

私の手から離れた第二ボタンは快晴の空にキラキラと光りながら、綺麗なカーブを描いて田んぼに落ちた。音はしなかった。

口をぼかんと開けて、ボタンの行方を見張って眺めている朱莉を無視して、私はそのまま家に向かって速足で帰った。振り返らずに家まで辿り着いた。後ろにいたはずの朱莉は、何も言つてこなかった。

私は自分の部屋に行くなりベッドに倒れ込み、枕を抱え込んだ。朱莉にしたことに対して泣いているのか、失恋から泣いているのか、よくわからなかった。今になって感情と思考が頭に雪崩込んできて、小さな嵐が心を乱していく中、後悔ばかりが目立った。

どうしてあんなことをしてしまったんだろう。親友の私にだけ分けてくれた秘密。勇気を振り絞つて勝ち取った思い出を、最も簡単に壊してしまった。そもそも陽介くんだって、ボタンを渡しただけかもしれない。付き合ってるわけじゃないのかもしれない。最初から、陽介くんが好きなんだって、朱莉が打ち明けてくれた時に、実は私もそうなのって言えばよかった。変に気を使って応援してるね。なんて言うんじゃないかった。でも、そんなことしたら嫌な雰囲気になつてたんじゃないの？　じゃあ私はどうしたらよかったの？

でも、暫くは学校で会わなくてもいいんだ。

そう思った時、母親が大声で私を呼ぶ声が聞こえた。

「優香？　今日はご馳走作つたよ！　降りておいでー！」

「今行くー！」

今は、特別な日に溺れていた。

結局、あれから朱莉には会わずに高校入学式を迎えていた。入学式の会場でお互いに目が

合っても、朱莉は嫌な顔をするでも、にこりと作り笑いをするでもなく、まるで怖い人と目があったってしまったとでもいうように、見ていなかったふりをして顔を逸らした。それが不自然にゆっくりと首を動かすものだから、私の方も緊張して何だか体が上手く動かなかった。自分からメッセージを送るにも、なんと書けばいいのかわからなくて、朱莉も何も言っていないから、結局私たちの間には奇妙な沈黙ができていた。最後のメッセージは、会場外で撮った二人の卒業式の写真で終わっていて、春の陽光のように暖かく笑い合っている笑顔が余計に私の心を乱した。

結局お互い膠着状態のまま、高校生活を送って一週間経っていた。付属高校とはいえ、新しい顔も数人分あって、新鮮な雰囲気はまだ教室に漂っていた。外部から来た女の子を、既にできていたお友達グループがまるで匿うように輪に入れていて、それは弁当の時間により明確になった。

高校生にもなったのだから自由にグループを作らせても大丈夫でしょう。という先生がよくわからない配慮で、弁当の時間には教室内にいくつも島ができた。一番大きな女子グループの島が教室の真ん中にできて、その周りにちょこちょこ小さな島ができる。教室の隅に隠れるようにして、中くらいの男子グループの島ができる。その割には、机を動かすのを面倒くさがった男子が、窓辺に座って弁当を食べたりして、ほとんどの教室の男子はそこに群がっていた。

私は、同中の二人の女子と机をくつつけあって、弁当を食べるのが当たり前になっていた。その内の一人の友美が「ねえ、朱莉と何かあったの?」と声を潜めて聞いてくるまで、私は朱莉が一人教室の隅で食べているのに気づかなかった。

「ん〜、なんか色々」

「色々って何? 気になるじゃんね?」

ね? と陽菜にも同意を求める。

興味を持たれているのが気持ちよくて、私は何があったのか話した。もちろん第二ボタンを投げたところは言わないで。

「え〜、何それ漫画みたい。でも、それじゃあこうなるよね」と言いながら二人とも私の話をおかずに弁当を平らげていく。

「いやでも、相手は私も好きって知らなかったからさ」

「何それ可哀そう。気遣ってたんだ? 優香は優しいね」

陽菜の言葉に友美がすかさず「でも普通、そういうのって気づかない?」と危ういことを言った。あ。

「わかるわかる。意外とわかりやすいよね。そういう誰が誰を好きかってやつ。特に親友同士ならね」

「てか第二ボタン貫うのとか古くない？」

「さあ？ まあロマンあるんじゃない？ わかんないけど」

「なんかそういう漫画みたいなことしたかったな？」

会話が川のように流れていく。特に何が起きたというわけではないのに、何故か徐々に輪が強くなっていくのを感じた。何かが目的を持って一定の方向に向かって進んでいく。一見、大したことなきそうなのに、その流れに逆らうのには何故か物凄い抵抗があつて、そもそも抵抗する意義もわからなくて、ただ流れに乗って私は黙って弁当の残りを食べていた。卵焼きがいつもより美味しく感じて、冷凍の小さなハンバーグも味がいつもより濃い気がした。

二週間もすると皆、授業風景にも慣れてきて、友人の輪も定着していた。私たちはお互いに、それぞれの生徒がどう分かれたかが、もう何となくわかる。

私はあれからお弁当と一緒に食べた友美と陽菜と行動を共にしていた。みんなと一緒にお弁当を食べるのが当たり前の毎日で、放課後はただただ教室に残って雑談したり、時々自転車飛ばしてカラオケに行ったりする。それは全て私が朱莉と一緒にしてきた事だったけれど、朱莉じゃないから楽しくないなんてことは全くなかった。けれど、朱莉と過ごした記憶の破片がチラついて、桶に張られた水が波立つような思いだった。それでも朱莉のいない学校生活は、砂に染みる水のようにゆっくりと、徐々に私の中に浸透していった。

いつの間にか体育祭が間近になって、自習時間は何のダンスを踊るかという話し合いに使われた。一年生は各クラスごとに何かを踊って、発表しなければならぬと決まっている。体育館の半分に、一年生が踊るための特別スペースを設けて、境界線のコーンの列の反対側には、誰でも二階席から降りてきて、間近で踊りを見ることができるフリースペースを作らしい。正面からも上からも、全校の高校生たちにじろじろと見下されながら、私たちは彼らを楽しませるパフォーマンスをしなくてはいけない。

自習時間の間、クラス委員長と副クラス委員長が教卓に立って、意見をまとめようとしている間、担任の先生は教室の角にある空席に座って、クラス全体の様子をただ見守っていた。朱莉の席が空席だということが、いつの間にか珍しくもなくなっていた。

どこの輪にも入れてもらえないところなる。

自然の摂理によって定められていることのように、誰もそれを疑問には思わなかったし、

誰も気にする様子ではなかった。

いくつか候補を見つけてきたという一番大きな女子グループが、今だけ特別に授業中の使用が許可されているスマホを使って、クラスのグループチャットに動画のリンクを三つ送った。

「女子はこのうちのどれかを踊るのが良いと思います」

誰も聞いたことのある洋楽が、小雨のように教室のところどころから流れてくる。小さな音量で私も動画を流すと、動画では綺麗なお姉さんが慣れた様子でダンスを披露していた。ぴったりと張り付いたヨガパンツと、腹筋が見える短いシャツを着て、活発に踊る女の人に、私は眉を蹙めた。この人が踊っているから可愛いのであって、私が踊ったらきつと笑われちゃうんじゃないかな。どうして人前で強制的に踊らされなきゃならないんだろう。しかも下ネタばかりで、セックスや理想の女の外見ばかり話しているような男子高校生たちの前。

人前で踊るといふのは、その人たちに自分がどれだけ性的魅力があるのか評価して、と示唆する行為のようで、どうしても体育祭が楽しくなるとは思えなかった。

「あと男子はこの曲でいいと思います」

そういつてすぐ、新たな動画のリンクが送られた。今度はノリのいい洋楽に合わせて、キヤップを目深に被った白人が踊っていた。数人の男子が不服そうに顔をしかめたけれど、それ以上何もしなかった。

結局その女子グループと、クラス委員長の間だけで話は盛り上がっていった。私含め、まるで勝手に決められたかのような状況に、クラスの間で不満が生まれているのは何となく肌で感じたけれど、誰も代替案など出せないの、ただ話を聞いていた。そもそも体育祭自体が、私と同じように皆不満なのに違いない。

踊る曲が決まって、振り付けも動画の通りにしようかと決定されたところで、先生が時間だから、と教卓に戻った。

「思ったより話が上手に進んで、先生抜きでみんな話をまとめられて良かったです。今日休んでいる朱莉さんに、誰かダンスのこと教えてくれますか？」

「あ、朱莉ちゃん、クラスのグループチャットにまだ入ってなくて」と女子の一人が戸惑いながら言った。誰か連絡先知ってる？と言う先生を他所に、何人かの生徒が私を横目で見たけれど、私はそれを無視した。私が朱莉ともう仲良くないのは、皆も知っていたので、誰も私が知っているかとは発言しなかった。

「じゃあ、先生の方から伝えておくれ。何より、話がスムーズに進んで良かったです。なん

だか、クラスみんなまでまとまってきた感じがするね」

そう無難に喜ぶ先生に、私はどこかで、先生という部外者には、やはり何も見えていないのか、と思った。

踊る曲も振り付けも決まれば、あとは個人でダンスの練習をするというのが流れなので、私たちは放課後、雑談するかわりにダンスの練習に励んでいた。スマホの小さな画面を覗のぞみながら、ダンスを試しに踊ってみようとしたけれど、周りの目が気になって、へらへら笑いながら、ふざけることしかできない。すると、友美がこうじゃない？ と動画を一度流し見したあと踊りだした。

「え、すご。才能じゃん」思わず言葉が出る。

「え、そう？ 簡単だよ。誰でもできるって」といらない謙遜をされる。

てつきり振り付けを習得するのに、体育祭に間に合うかどうかギリギリなのではないかと思っただけれど、友美がダンスの講師代わりになることで、何とか乗り越えられそうだという希望が見えた。

次の日、朱莉は学校に登校してきた。

まだらに出席と欠席を繰り返していたので、そのこと自体に驚きはなかった。けれど放課後、朱莉が入学して以来ほとんど初めて私たちに話しかけてきた。

「私にも、ダンス教えてくれない？」

ちよつと俯うつむき気味に言う朱莉に友美も陽菜も、いいよ。と何ともなさそうに返答した。

けれど、雪が降る直前の空模様のように、私の心は重く不穏だった。

不思議なことに、それから放課後だけは朱莉が私たちのグループに入ってくるようになった。移動教室も、弁当を食べる時もないのに、放課後のダンスの練習だけは朱莉がいる。けれど、友美が主にダンスを指導してくれているおかげで、私は朱莉と積極的に話す必要がなかった。だから、何となく二人で領域を共有する時間が増えるばかりで、心は一向に通わないままだった。

そして今日の放課後もダンスを踊る。振り付けを大体覚えた今になって、いくつかの振り付けが妙に気取っていることに気づき気に障る。腰を揺らしたり、体をうねらせたり、体の曲線を強調させるような振り付けを踊るたびに心が荒すさんだ。正直羞恥心すざんしんを押し殺して踊るのが苦痛だった。それでも、本番で一人だけ踊れないのはもつと恐ろしいから、嫌でも必死に踊り続けた。

横目で朱莉を見ると、ダンスもわかりやすく下手くそで、きっと朱莉も私と同じ気持ちに違いないと確信した。その共通点が、隙間風のような寂しさを私に思い出させ、私の心をより乾かした。

陽菜が休憩しようと言って椅子に座ったのを筆頭に、私たちは踊るのを一旦いったんやめた。

「今日カラオケに行かない？ 昨日バイト代貰って、お金あるからどうかな？ と思って」

「私はいいけど、みんなはどうする？」と友美が言う。

「いいよ。最近ダンスしかしてないし」

「朱莉はどうする？」と友美が聞いた。私は朱莉の顔を見れなかった。

「え、いいの？ 行きたいな」

「じゃあ、五時半にカラオケ集合でいい？」と陽菜がみんなに確認をとる。

「あ、私一旦家に帰らないとなんだよね」と友美が言う。

「じゃあ、一旦みんな帰って、カラオケ先に来た人から始めない？ どうせフリーだし」と

言いながら陽菜がいつものカラオケ店の料金表を調べ始めた。

「いいよ。じゃあカラオケ行った人から部屋番号グループチャットに書いといて」と友美が

言って、話は終わった。

久々のカラオケに高揚して、親にカラオケに行くから遅くなると即座に連絡を入れた。本当はまだダンスの練習をしたかったけれど、友美と陽菜が今から帰るので、私もそうすることにした。朱莉と二人きりになりたくなかった。

一人で田んぼに囲まれた道を自転車にかけていく。空が曇っていて、雨が降りそうだから丁度帰って良かったと安堵あんどした。家で制服から普段着に着替えて、小さなカバンに財布と折りたたみ傘だけ突っ込んでまた自転車に乗る。そのままカラオケ店に向かって、着いた頃には六時前になっていた。携帯を確認してみると既にグループチャットに部屋番号が書いてあって、店員にそれを伝えて会計を済ませる。コップにコーラを入れてから部屋に行くと、友美と陽菜が二人で流行りの曲を歌っているところだった。部屋に朱莉はいなかった。私は気にせず、ソファアに座って選曲し始める。持ってきたコーラの炭酸が抜けてきた頃に陽菜が「朱莉来ないね」と唐突に言った。

「あ、そう言えばそうだね」

「あれ、てか朱莉グループチャットにいないよね？ ヤバ、どうする？」と友美が言った。

驚くほどすらりと出てきた、どうする？ という問いに、誰も眉を顰めなかった。みんな中学から同じなのだから、朱莉の連絡先を持っていないということはほぼあり得ない。けど、誰も朱莉に個人的にメッセージを送ろうとしなかった。

「まあ、いつか。もう結構時間過ぎちゃったし、今更来ても損だよ」と友美が開き直った。それを最後にカラオケは続行された。ころころと移り変わる彼女たちの関心が、時に残酷なほどに、関心事以外のことなど気にかけてもしなかった。

私は急に美佐が抜けたグループのことを思い出して、今になって、もうちっとも誰かが欠けているような気なんて起きなかった。

「では点呼を取ります」

担任が名前を読み上げていく。テンポよく読まれる名前と生徒の返事がリズムを築いていた時、急にそのリズムが途切れた。

「朱莉さん。朱莉さん？」

途切れたリズムの不快さに、今になって朱莉が休むのは久しぶりだと気づいた。欠席ですね。という担任の声を最後に、周りの声がただの遠い雑音になった。朱莉のことを、まるで怪我した野良犬を見た時のように可哀そうだと思った。でも、それだけだった。

この日を境に、朱莉はピタリと学校に来なくなった。やがてそれが普通になり誰も、どうして来ないんだろう、なんて興味は持たなかった。

「今日は先生から皆さんにお話があります」

体育祭のクラスTシャツのデザインを募集するはずだった時間、急に先生が改まった顔でそう言った。

「朱莉さんが学校に行くのを嫌がっていて、いじめられていたのではないかと親御さんから相談を受けました。クラスで何かあったのではないかと先生も困っています。何か知っている人はいますか？」

何もなかったから行きたくない。誰も知らないから行きたくない。そういうことだとなぜ気づかないんだろう。

みんな不思議そうな顔で見合った後に、黙っているものや、ふざけて笑っているもの、談笑を始めるものがいた。みんな特に真剣に捉えてなどいないようだった。そんなものだよ。そんなものかな？

「何もないかな？ 言いづらかったら後で先生にこっそり教えてくれてもいいので」

そう言って先生は何事もなかったかのように、Tシャツのデザインを考えてきてください。と一枚一枚プリントを配った。

プリントにはTシャツ型のイラストが描いてあって、そこに自分で絵を描き足してデザインを作るらしい。とはいえ自由参加なので、どうせまたあの女子グループが何か考えてくるに違いないと、その紙を鞆かばんの奥に乱雑に突っ込んだ。

放課後、みんなでダンスの練習をしていた時、担任が教室にやってきた。

「優香さん、ちよつといいかな」

「え、はい」

教室にまだ残っていたみんなの視線が刺さったけれど、ダンスを練習する靴音と音楽は止まることがなかった。

職員室に連れていかれるやいなや、先生は私が虐めていいるのではないかと言った。職員室にいる先生たちの聞こえぬふりが、更に居心地を悪くさせた。

「何か心当たらない？」

「ないです」

「本当に？」

「はい」

確かに遠巻きにはしていたけれど、積極的に悪意を持って、朱莉を傷つけたことなんてない。

「朱莉さんね、昨夜自分のことを切ったんだよ」

開いた口が塞がらなかった。そんなことを言っって何がしたいの？

私の返答を少しの間待った先生は、私の沈黙を何と受け取ったのか「親御さんに朱莉さんのことと、今日送迎に来てもらうように連絡するから、荷物をここに持ってきなさい」と言った。

嫌ですなんて言えなくて、はい、と言っって職員室を出る。教室ではまだ、みんながダンスの練習をしていて、鞆を取る私に、帰るの？ と訊いてきた。帰る、と平然を装うと、また明日、と向こうも何ともなさそうに返答して、さっさと視線をスマホに戻した。

職員室に戻ったあと、私はただ黙ってパイプ椅子に座っていた。朱莉のいない椅子も、これくらい冷たいのだろうか。

暫くして、職員室の扉が開いた。こちらですと職員に案内されたお母さんが、覗くようにして職員室内を見渡した後、私の顔を見た途端、母親の顔になった。

「いつもお世話になっております。優香の母です。うちの娘が大変な迷惑をおかけして申し訳ありません」

担任に駆け寄るが早々、頭を深く下げのお母さんに、私は顔が熱くなっていくのを感じた。

「いえいえ、こちらこそ担任の立場でありながらすみません」

「本当に申し訳ありませんでした。優香、行くよ。先生に挨拶して」

「さようなら」

「はい、さようなら。また明日ね優香さん」

目まぐるしくやりとりがなされていく中、半ば強引に職員室から連れ出され、そのまま車に乗せられた。暫くの間、私は誰かに見られるんじゃないかと怖くなって、窓の外から見えないように俯いていた。お母さんは何も言わずに運転した。

家に到着し、車から出るとお母さんが、そのままリビングに座りなさい。と厳しい、叱る時の声で言った。玄関で靴を脱いでいる時、お父さんが部屋から出てきて驚いた。普段ならまだ会社にいる時間なのに。

お父さんは何も言わなかった。私は顔を見れなくて、下ばかり見ていた。

リビングのテーブルに着くと、お母さんが「朱莉ちゃんを無視していじめてたって、クラスメイトの子が教えてくれたって担任の先生から聞いたけど」と言った。

「ママてつきり、二人は親友なんだと思ってたけど、どうしたの？ 喧嘩したの？」

「無視してたってというのは本当なの？」

「：無視してたっていうか、ちょっと気まずかったの」

絞り出した答えだった。

「どうして気まずくなるの？」

また沈黙。向かい合わせに座る私とお母さんとは違って、お父さんはずっとテーブルの隣に立って腕を組んでいた。表情は硬く、いつもの温厚なお父さんの雰囲気は皆無だった。

「言いたくないならいい。ママが朱莉さん家に行って謝ってくるから」

「なんで？ しなくていいよ」

「何でしなくていいの？ ちゃんとやってくれないとママわからないよ？」

「もういいじゃん！ ほっといてよ！」

お母さんが驚いた顔でこちらを見た。

「いじめてない。それに……向こうに問題があるんじゃないの。いじめられる側にも原因があるっていうじゃん」

「本気でそう言ってるのかお前！」

唐突な、鼓膜を劈くお父さんの怒号に、全身鳥肌が立った。背筋が凍って、ぴんと張った背中に急に汗が噴き出す。

「俺が家に居なかったのが悪いか？ なあ？ 俺がもつとお前といれば、そんなふうには育たなかったのか？」

ぶたれるかと思うほど、お父さんの剣幕は凄まじかった。お父さんの唾が飛んでくるのを気にするどころじゃない。体が硬直して視界が揺らいだ。必死に泣くのを我慢している時、お母さんがお父さんに、外に行つてちょっと落ち着いてきたら、と玄関外へと促した。

玄関を閉める音がした途端、体の緊張は解けたけれど、それと同時に、生まれた奇妙な静けさに居心地が悪くなる。お母さんと目線がかち合つて、途端に動けなくなった。

「あのね、優香」

お母さんは優しい顔をした。

「私も昔、いじめられてたの」

空気が凍てつき息が詰まる。お母さんの表情に落ちる影がみるみる濃くなった気がして、足元がますます寒く感じる。

「ね？ 大切な人がいじめられてるって思うと、優香が何をしてきたのか、少しは身近になつたんじゃない？ 優香がしてることはそういうことなのよ。いじめは何も解決しないの」と言つて、お母さんが悲しそうな顔をした。

もう張り詰めた空気は感じなかった。私はただ、緊張して強張った身体と冷たい脇汗を感じていた。お母さんは、話はこれで終わったとばかりに立ち上がつて、玄関に向かつた。

玄関から聞こえてくるお父さんとお母さんの会話のやり取りが、どこか他人事のように思えた。

あの後、私はお母さんと一緒に朱莉の家に謝りに行つた。今まで無視してしまっていたこと、私が陽介くんのことを好きで、第二ボタンを投げてしまったこと。私が覚えていた限りの心無い行動を一つ一つ朱莉に打ち明けて謝ると、朱莉は私の謝罪に、いいよ、と言つて許してくれた。私はなんてお人好しなんだらうと思つた。

その後学校で、私は償うようになにかと朱莉を誘つた。弁当を食べるときも、ダンスをするときも、カラオケに行くときも、ファミレスに行くときも。グループチャットに朱莉の連絡先を入れることで、グループ内でも朱莉は馴染んだ。何かを取り返そうとするかのように、朱莉は常に私たちについて回つた。

きつと傍から見たら、全てまるく収まったように見えると思う。けれど、私は今でもお母さんの言葉が忘れられなかった。

お母さんは例え話として、いじめられていたと言つたけれど、あれは実は本当だったんじゃないだろうか。

確かめることもできなくて、ただ日々が過ぎていった。

体育祭当日。意外にも他クラスは皆簡単な振り付けのダンスばかりを踊っていて、本格的な振り付けのダンスを踊った私たちのクラスは大盛り上がりだった。踊り終わって退場する時に、歓声の中、お母さんの姿を探した。お母さんは私をしっかりと見ていて楽しそうに笑っていた。

心の棘とげが、まるで喉に小骨が刺さったように、鋭い痛みをまだらに与える。

私は、朱莉に贖罪しよくざいすることでお母さんに対するいじめの免罪符を買っているのだと思っただ。

お母さんの笑顔を見る度たびに。私は朱莉に話しかけた。(了)